江戸後期の家相書と庭造りの吉凶

‘Kaso-sho’, Textbook of House Aspects (Art of Divination), and ‘Kichi or Kyo’ (good or ill luck) of Landscape Gardening in the late Edo Period

丸山 宏*
Hiroshi MARUYAMA

摘要：北村援琴著『築山庭造伝』（1735）、あるいはその後に続く秋里籬島著『築山庭造伝後編』（1828）等の刊行は江戸後期における市井の庭造りの隆盛を裏付けるものであるが、江戸後期に刊行された家相書にも庭造りの樹木・池泉・築山に言及したものが多く残されている。家相見は江戸期の安定化社会における宮廷陰陽道の市井での復権、大衆化の現れであった。この家相見により庶民は庭造りの吉凶の占いを請い、何らかの規範が示されることを求めた。家相書には作庭技法についての記述は少ないが、池泉・樹木・築山等についての吉凶が詳細に記された。本稿は江戸の庭造りの一端を巷間に流布した家相書から検討するものである。

1. はじめに

享保20年(1735)、北村援琴著『築山庭造伝』が出版され、また、文政10年(1827)には秋里籬島の『石組園生八重垣伝』、翌文政11年(1828)には、『築山庭造伝後編』が相次いで刊行された。これらは江戸後期における市井の庭造りの隆盛を裏付けるものである。18世紀末の天明期以降、多く出版されたいわゆる家相書にも庭造りに関連する記載が残されている。江戸期の安定化した社会において、衰微した宮廷陰陽道が民間で復活し、その大衆化の一つの現れが家相見であった。庭造りにも言及したのはその需要があった証左でもある。家相家は庶民に対して何らかの規範を提示し、具体的な吉凶を占ったわけである。写本も含め家相書には池泉、樹木、築山等についての吉凶が詳細に記されたものがある。家相書の類はいわゆる雑書として資料的に価値が低いものと認識され、従来あまり研究対象となることは少なかった。しかしながら、江戸期における庶民の生活意識、生活規範を形づくっていたのはこれら雑書類である。庭造りという行為もまた巷間に広がるにつれ、俗信、迷信ではあっても家相見によってその吉凶を判断したわけである。今回本稿を纏めるにあたって『国書総目録』（増訂版）、『古典籍総目録』の欠を補う琴堂文庫の存在が大きい。現在彦根城博物館の所蔵になる琴堂文庫は井伊直忠が蒐集した文庫であるが、特に易学、相学関係書のコレクションとしては点数的にも質的にも貴重なものである。¹⁾ その中に家相関係の版本、写本が多く含まれている。本稿では琴堂文庫の家相書の分析を中心に江戸後期における市井の庭造りに与えた家相について考察したい。

2. 江戸後期家相書にみる庭造りの吉凶

家相書に記載されている庭造りの言及は造庭書のような実際の技法・技術について記したものではないが、家相からみた樹木・池泉・築山等の吉凶を記したものである。表一は『国書総目録』『古典籍総目録』それに『琴堂文庫』から作成した家相書の一覧である。この表を見ると18世紀末の天明期から幕末まで途切れることなく家相書が刊行、あるいは写本として伝えられていたことがわかる。表の○印の著書が樹木・池泉・築山等について何らかの言及がなされているものである。×印は庭に関連する記載がなかったもので、家相書すべてに庭に関連することが書かれていないわけではない。以下項目にわけて検討していきたい。

(1) 樹木による吉凶

表一の○印の家相書を通観すると庭造りに限れば樹木に関する記述が最も多い。この節では樹木について便宜的に表一2、3にわけて論じたい。

表一2は樹木の位置(方位)・樹姿からみた吉凶を整理したものである。方位による吉凶・樹枝の方向それに家の門まわりの樹木についての吉凶である。概して北から東にかけての方位が吉相で、北西から南西の方位が凶相となっている。家相書によって異同があり、吉凶が逆転する方位もある。また、土地の条件により方位が同じでも吉凶両相があるものもある。「艮(北東)ノ方位ニ樹木アル事吉凶両断アリ総テ高貴ノ地域ハ広地ハ格別凡卑賤ノ狭構ニ大樹高木アルハ大凶相ナリ」(『相宅小鑑』)これは土地の広狭・貴賤により北東の吉凶が逆になる例である。また、注目すべきは門前における樹姿についての詳細な記述が見られることである。この門前についての吉凶は後述する中国明代の『三才図会』からの影響があると思われる。表には載せなかったが、門前については樹木だけでなく草についても言及がある。「門前青草を生ずればうれへ事多し」(『家相秘録』)、「門前ニ草多ク生スレハ近キ内愁事有り」(『家相方位図説』)、「門前ニ青草繁ク生スレハ患多シ」(『家相秘要鑑』)等門前の青草を凶相としていることがわかる。また、家の前後に樹勢がよく青々とし、鳥が棲みついているのは吉相で、樹枝が家に向かって伸びている樹木も吉相とある。「宅の前後竹木青く茂り鳥おほくすみて四季ともにたへざるは吉なり発達を主る」(『家相秘録』)、「宅ノ前後樹木自然ト盤旋シテ家ニ向ヒ枝葉繁ル時ハ富貴ニシテ発達スルナリ」(『宅相極秘洛地準則』)その逆に家の外へ向かう枝葉は凶相であると。しかしながら『家相方位指南』では吉凶が逆となっている。ただし「巽(南東)隅ニ有」れば家に向かっても吉相であると。

次に樹種からみた吉凶について検討したい。表一3は樹種によって整理した吉凶である。吉相の樹種として松・竹・梅・棗・榆・奈^{ナツ}等があげられる。凶相は桐・芭蕉・桑・榿・櫻桃・蘇鉄・茶等である。両相を持つものとして、桃・柳・石榴等があり、植栽する方位・場所による。吉相である梅でも軒際に植えるのはよろしくないという記載もある(『家相方位指南』)。竹・松はほぼどこに植えても吉であるが、多くのものは植栽の方位あるいは植栽の場所が決められている。寝所・家屋の前後・門が家相の判断の場として重要なポイントとなっている。

*京都大学大学院農学研究科

(2) 池泉の吉凶

池泉の吉凶は表一4の通りである。概して池泉の方位が吉となるのは北西の方角で、凶となるのは北東の鬼門の位置にある場合である。さらに、池を掘る時期、年回りについて詳細に記したものもある。「甲子甲辰の年ハ北少し西に池を堀べからず。己ノ西己ノ丑の年ハ西少し南に池をはる事を忌。丙午丙戌の年は南少し東にはる事をいむ。亥卯未の歳ハ寅の方則東少し北を忌べし。又年極の方に池を堀事もっともいむべし」(『家相秘録』) また、方位以外の居間・門前・入口といった家屋の具体的な場所による凶相についても言及している。「門前ニ池ニツ有ハ哭字頭ト云テ大ニ忌也」(『家相秘要鑑』) これはさきほど述べた樹木と同じ見方である。安政7年(1860)の『宅相極秘洛地準則』(多田鳴鳳著)には他の家相書とは方位の吉凶の表現を異にしている。十干十二支によっており、少しの方位の違いで吉凶が変化している。参考までに以下引用しておく。「井泉池貯総論 井泉池貯総テ水気ヲ相ニハ前ノ羅経之説ヲ熟読シ正針ヨリ半位後ル所ノ縫針ヲ用テ之ヲ窺ハズンバ其妙斷ヲ得ル事難シ井泉ヨリ水流レ去方ハ八干[甲乙丙丁庚辛壬癸]之方ヲ吉トス十二支之方ハ凶ナリ卯ノ方ヘ流れ出レバ卯年、午ノ方ヘ流れ出レバ午年ニ凶事来ル餘ハ右ニ准ジ

テ知ベシ」

(3) 築山の吉凶

表一5は築山の吉凶である。吉相は北東から西の方角で、凶相は東から南西の方角である。樹木・池泉に比べると家相書間の異同は少ないようである。『家相図説大全』と『家相全書』の例をあげておく。

「築山有所之弁 南の方に築山あるハ逆を布の備なりといへども又相生の意味も無きにあらず半凶半吉の構とす。然ども前の図の如きハ南側の宅なるが故に難ずる事なく吉祥なり。住人職録全きの理にして家宅を増長なるべきの意味を兼ねの良相なり。地理に曰南に山岳あるハ凶なり。其土地大に衰微に至る然といへども其地において北を前とし南を後として居を布く則ハ其一箇の宅興栄を主どりて吉也と云り。此理と相違きものなり。猶又築山西の方乾の方北の方にあるハ至て吉。坤(南西)の方艮(北東)の方にあるハ大凶。東の方巽(南東)の方にあるハ不吉也。」(『家相図説大全』) 「築山 乾(北西)ノ方ヨリ、艮(北東)ノ方ヘカケテ有ハ、主人爵禄ヲ得ノ吉相也。又家内和睦也。東ノ方ヨリ、巽(南東)ノ方、又ハ南ヘカケテ有トキハ、陽氣ヲ閉塞ノ意ニシテ、散財衰微ヲ司リ疾病綿々也。坤(南西)、西ノ方ニアルトキハ、不思ノ物入アリテ

表一1 江戸後期の家相書の版本・写本一覧

刊行(成立)年	書名	著者	刊行(成立)年	書名	著者
x1782(天明2刊)	SK家相口訣	大江古易堂	1825(文政8)	S家相速伝	福島正富
01782(天明2刊)	DK家相秘録	疋田慶明	x1825(文政8)	K家相速伝暦方撰	福島正富
01783(天明3)	SK家相秘録	疋田慶明	01825(文政8)	K家相方位図説/写	高岡道人
x1792(寛政4)	K鎮宅靈符弁	山本信有	01825(文政8)	K家相秘要鑑/写	純東斎
01798(寛政10刊)	SDK家相図解	松浦久信	1825(文政8刊)	S家相図解	松浦久信
x1798(寛政10刊)	K懷宝家相早合点	橋子	01826(文政9)	K家相秘伝/写	睦堂江澤講修
1799(寛政11)	S家相玄機略/写	西岡玉全	x1826(文政9)	K家相秘録/写	高岡金剛
1799(寛政11)	S家相伝口伝最初/写	—	x1826(文政9)	K家相秘訣集成的要/写	楠野玄亨
1800(寛政12)	S家相略記図/写	—	01828(文政11)	K家相要書/写	黙斎写所蔵
1800(寛政12)	S家相(図説)大全	松浦久信	1829(文政12刊)	S家相得失辨	—
x1801(享和元)	SK家相故歴伝/写	松浦久信	1829(文政12刊)	S家相秘伝録 一貫堂先生(朝見五通)	一貫堂先生
1801(享和元刊)	S家相(図説)大全	松浦久信	x1829(文政12刊)	K家相福祿録	—
01802(享和2刊)	SDK家相図説大全	松浦久信	1829(文政12)	K家相秘用四神之巻	—
01802(享和2刊)	SDK相宅小鑑	苗村三敲	1830(文政13刊)	S家相秘伝録	一貫堂先生
1803(享和3刊)	S家相大全	長田藁雀	1830(文政13刊)	S相宅心書	浅井米山
x1803(享和3)	K図解捷徑家相全書	長田藁雀	1831(天保2)	S方位月家神殺之則覧	原桂二由雄
x1803(享和3)	K家相目安草	西岡玉泉	01831(天保2)	K家相秘伝録/写	櫛田平蔵
x1804(享和4刊)	SDK家相必用方鑒精義大成	松浦久信	1834(天保5刊)	SD家相一覽	松浦琴鶴
01804(文化元序)	SD家相(図解)全書	長田藁雀	1840(天保11刊)	SD家相秘伝集	松浦琴鶴
01806(文化3)	K家相秘録/写	疋田慶明	01844(天保15刊)	DK宅方明鑒	平沢白翁(勝)
1807(文化4)	K家相秘録(略記図説)/写 (木邨盛芳写)	—	01844(天保15)	K家相伝四神中央之奥儀/写	高岡松坡喜昇校
1807(文化4刊)	S地理家相秘竅	落合益・安藤秀林	x1844(天保15刊)	K家相四神中央巻/写	松浦久信
x1808(文化5)	K家相玄機略	西岡玉全	1845(弘化2刊)	SD家相千百年眼	平沢白翁
1811(文化8序)	S家相本義	佐藤蔵人	1845(弘化2刊)	S家相辨義	松浦琴鶴
1812(文化9刊)	S家相免許	—	1846(弘化3)	S相宅知天鏡	穴戸富鄰
x1813(文化10)	SK家相故歴伝	松浦久信	1847(弘化4)	S家相深秘/写	松浦幸最
x1813(文化10)	K家相秘録/写	楫直良	01850(嘉永3)	K家相方位指南	穴戸頼母富鄰
x1813(文化10)	K図解捷徑家相全書	長田藁雀	x1852(嘉永5)	K家相秘伝書/写	松浦筑波
1815(文化12)	S(方位家相)三才精義	西岡玉全	x1852(嘉永5)	K家相宝鑑	市島比龍子
1816(文化13)	S家相秘書/写 秋野法師門人山田某	—	x1855(安政2)	K和国家相古実比象録/写	四方庵一遊
x1817(文化14)	K家相内門伝/写	松浦東鶏	01859(安政6)	K家相極秘白虎巻及附録	板東嘉次右衛門
x1818(文政元刊)	K家相方家(位)図説	賀茂保久	01860(安政7)	K宅相極秘洛地準則	多田鳴鳳
x1820(文政3刊)	SDK家相方位図説	賀茂保久	1861(文久元刊)	S家相方位徴古説	溝口省翁
x1820(文政3刊)	K吉辰至宝方家図説	賀茂保久	1862(文久2刊)	S家相(図説)大全	松浦久信
x1820(文政3)	K家相四神中央五巻附言/写	源栄寿	x1865(元治2)	K不許他見相宅鳴鳳奇観/写	多田賛
x1823(文政6)	K家相考羅経正伝/写 高岡三代祥三直彦	—	1865(慶応元)	S家相改正口義伝	藤田寛斎

0:樹木・池泉・築山等について言及が確認できたもの x:同左について言及がないと確認できたもの
刊年・成立年不明分は除く Kは琴堂文庫/Sは国書・古典籍総目録にあるもの/Dは大惣本

財ヲ失フ也。)(『家相全書』)

(4) その他

いまで述べた樹木・池泉・築山以外についても記載は少ないが以下のものに言及がある。

石灯籠について『家相全書』(1804)には「是火徳ヲ以テ暗闇ヲ明輝スル物ナリ、故ニ艮南、坤ノ方ニ置テ吉ト」あり、北東・南・南西に置くのは吉であると。

石については『家相伝四神中央之奥義 風水玄気録』²⁾(高岡松坡喜昇校/天保 15[1844]/安政 3[1856]写本)にこうある。

「一青石の欠口モナキ生石を飛石ニ用ヒ踏付ル時ハ家内ニ争論発ル也水気アル所ヘ用テ居石ニナスハ宜シ右ノ如キ石ヲ石碍トナス時は必家断絶スルモノ也

一石の水走りヲ用ユル住人家名終ニ絶ユル事ナシ

一石臼を礎ニ用タル住所ハ長久スル事ナシ」

また、『家相方位指南』(穴戸頼母富鄰³⁾ 著/嘉永 3[1850])には「庭石ニ字有るか石臼などを用るハ大凶又兎石等醜石有ハ醜き子とも生る方石ハ貴子を生ず三角石ハ火災坤(南西)の立石大凶也」と。字刻のある石あるいは石臼を使うのは凶相であると戒めているが、逆に考えると実際には庭によく使われたからこそこの記述があったのではないだろうか。

手水鉢についてもいくつかの家相書に散見するが、この手水鉢は縁先手水と考えられる。『家相全書』の例をあげておく。

「手水鉢之事 是艮(北東)、南坤(南西)ノ方ヲ忌ナリ、其外ハ宜シ、手水鉢ハ不浄ヲ雪グノ器ナレバ、吉凶斯考ヘアルベキナリ」

表-2 樹木の位置・樹姿による吉凶

書 名	吉	凶
家相秘録(1782)	家の前後に茂りその枝が宅に向かう樹・家の前後に青々と茂り鳥の棲む木竹	門口に対する大樹・門前に二又のある樹・軒近くの大樹・花実が凋み落ちる樹・枯れて宅に向かう樹・庭の真ん中に樹木が多きこと・中庭に陰を作る樹・枝葉[反枝]が宅の外へ向かう樹
相宅小鑑(1802)	東の樹・南東の樹・南の樹(低木)	南西の大樹・西の大樹・北西の大樹・
家相全書(1804)	北の樹・北東の樹(高貴の地、広地)	北東の大樹(卑賤の地、狭地)
家相方位図説(1825)	北西の大樹・北、北東の大樹	南東、南の大樹・南西、西の大樹
家相秘要鑑(1825)	西南西～北北東の木類の植込	門前的大木・二股の木・南西の大木・南東の大木
	東の樹・南東の樹・南の樹(低木)・北の樹・北東の樹(高貴の地、広地)	南西の大樹・西の大樹・北西の大樹・北東の樹(卑賤の地、狭地)
		門前の朽ちた大樹、二股の樹、大樹
家相秘伝(1826)	南の樹	—
家相要書(1828)	南の樹	—
家相秘伝録(1831)	—	門前的大木・門前に瘤のある老木・家を覆う大木・門前に上部が太い木…
家相伝四神中央之奥義(1844)	—	枝が家に向かう樹
家相方位指南(1850)	枝が家に向かう樹(南東)	陰葉樹・大木・枝が家に向かう樹・
家相極秘白虎巻(1859)	家の前後に茂り枝が家に向かう樹	軒近き大樹・枝葉が家の外へ向かう樹・花実が凋み落ちる樹・枯れて家に向かう樹・中庭に樹木が多く陰を作る樹
宅相極秘洛地準則(1860)	西南、東北以外の繁茂する大樹・家の前後に茂り枝が家に向かう樹・家の前後に青々と茂り鳥の棲む木竹	門前的大木・大樹の空心木・軒近き木・庭前的大樹・南西、北東の大樹・不自然な樹形の木・家の四囲に繁茂する樹木・瘤ある大樹・枝葉[反枝]が宅の外へ向かう樹・花実が黄ばみ凋む樹

*()内は植栽の方角・場所

表-3 樹種による吉凶

書 名	吉	凶
家相秘録(1782)	竹(四方)・松・柘榴(西・寝所前・裏先)	柳(西・門外)・杏(屋東)・桐(庭前)・芭蕉・桑(前栽)
	桃(東)・柳(東)・檣(西・屋後)・槐(中門)	桃(前栽)・槿(前栽)
	梅(南)・棗(南・門内・屋前)・奈(北)・杏(北)	
家相秘要鑑(1825)	—	柳(門前、門脇)
家相秘伝録(1831)	松・竹	—
家相伝四神中央之奥義(1844)	—	梨(南)
家相方位指南(1850)	松・竹・柿・梅(南西・南東)	樅・槐・楠・柘榴・柳・櫻・芭蕉・蘇鉄・梅(軒際)
	桃(北東)・柘榴(寝所前)	梨(南西)
家相極秘白虎巻(1859)	竹(四方)・松・柘榴(西・寝所前・裏先)	柳(西・門外)・杏(屋東)・芭蕉・桑(前栽)・桃(前栽)
	桃(東)・柳(東)・檣(西・屋後)・槐(中門)	槿(前栽)・茶(中庭)
	梅(南)・棗(南)・奈杏[リゴ](北)	
宅相極秘洛地準則(1860)	槐(中門)・檣(屋後)	楊柳(門前)・桐(井・庭前)・芭蕉(庭前)・蘇鉄(同)
	柘榴(屋前後・寝所近)・竹(四方)	櫻杞(同)・蓮(同)・桑(同)・桃(同)・木槿(同)

*()内は植栽の方角・場所

表－4 池泉方位の吉凶

書 名	吉	凶
家相秘録(1782)	東へ流れる川	家の西の池(白虎口)・居間の後ろの泉水・西へ流れる川・門口から外へ流れる溝
家相図説大全(1802)	東・北の池泉水(半吉)、西、北西、南東	南西の泉水・北東の池泉水・東・北の池泉水(半凶)
相宅小鑑(1802)	南南東・西・北西	東・南東・南・南西・北・東北
家相全書(1804)	東・南東	西～北・北・北東
家相方位図説(1825)	—	表裏入口の井戸泉水
家相秘要鑑(1825)	南南東・西・北西	東・南東・南・西南・北・北東・門前(二ツの池)
家相要書(1828)	東・南東・西・北西	南・南西・北・北東
宅方明鑑(1844)	西北・南東	北東・北・南西・西
家相方位指南(1850)	東・南東・北西・西・北	南・南西・西・北・北東
家相極秘白虎巻(1859)	東へ流れる川	宅の西の池(白虎口)・居間の後ろの泉水・西・西へ流れる川・門口から外へ流れる溝
宅相極秘洛地準則(1860)	八千の方位	十二支の方位

3. 四神相応の地と樹木

四神相応の地の考え方は古代の陰陽道に遡るが、庭については平安時代後期(11世紀中頃)に書かれた最古の作庭書である『作庭記』にもみられる。「樹事」の項に「人の居所の四方に木をうゑて、四神具足の地となすべき事。経云、家より東に流水あるを青龍とす。もしその流水なければ、柳九本をうゑて青龍の代とす。西に大道あるを白虎とす。若其大道なければ、楸七本をうゑて白虎の代とす。南前に池あるを朱雀とす。若其池なければ、桂九本をうゑて朱雀の代とす。北後にをかあるを玄武とす。もしその岳なければ、楡三本をうゑて玄武の代とす。」⁴⁾ という記載がある。四神相応の地に家屋を建てるのが最も好ましいが、それができない場合には樹木を植えることによって代替できるというのが、「樹事」に述べられている。

『家相秘録』(疋田慶明著／天明2年刊[1782])にも四神相応の地についての説明がある。

「相宅附説四則 住宅左に流水ある是を青龍と云。右に長道ある是を白虎と云。前に沃池ある是を朱雀と云。後に丘陵ある是を玄武と云。これを尤貴地とする也。但し三才発秘に此説を弁する事詳かなり。青龍白虎朱雀玄武ただ左右前後を則て云時は方角に図て大に誤るべし。南に向ひていふ時は右の通りにて然るべし。もし又東にむかひ西に向ひ北に向ふ時は大に顛倒す。青龍は東に属し白虎ハ西に属し朱雀は南に属し玄武ハ北に属す。然れば左ハ則東右ハ則西前ハ南後ハ北なり。此方角を定めて是を論すべし」

さらに、代替の樹木について「扱青龍白虎等に属する流水長道池岡等これなき時は東に桃柳を植て南に梅棗をうへ西に楡楡北からなし奈 杏を種べし」とある。代わりになる樹木は東が桃・柳、南が梅・棗、西が楡・楡、北が奈・杏である。

また、『家相秘要鑑』(純東斎著／文政8[1825]写本／肥後熊本)には「四神相応之地 東有流水曰青龍、南有澤畔曰朱雀、西有大道曰白虎、北有山峯曰玄武、右此四物具足則ハ謂四神相応之地若一ツモ欠ルトキハ災害其方ヨリ至ル、東ニ青龍ナキトキハ柳九本是ヲ可植柳ハ水木也、南ニ澤畔ナキトキハ桐七本是ヲ可植桐ハ朱雀栖巢也、西無大道トキハ梅八本是ヲ可植梅ハ白虎ノ棲居也、北ニ無山峯トキハ槐六本是ヲ可植槐ハ山頭ノ莊木也、右四神ノ備欠タル方エ雖植是具地面ノ広狭ニ随ヒ其数可見合、又ハ三都広邑ノ城下津浦ニ於テ空地ナキ場所ハ右植物ニ等シキ事極口伝ニ洩ス」

とあり、代わりになる樹木は東が柳9本、南が桐7本、西が梅8本、北が槐6本である。土地の広狭によりその本数を加減するようにと述べている。

以上三点を纏めると下記ようになる。

	東(青龍)	南(朱雀)	西(白虎)	北(玄武)
作庭記(11C)	柳9本	桂9本	楸7本	楡3本
家相秘録(1782)	桃柳	梅棗	楡楡	奈杏
家相秘要鑑(1825)	柳9本	桐7本	梅8本	槐6本

先に述べた表－3の樹種による吉凶と比較すると『家相秘録』の桃・柳・梅・棗・楡・奈・杏は吉相の樹種・方位にあることがわかる。楡については記載がない。『家相秘要鑑』には門前・門脇の柳が凶とだけ記されており、特に樹種の言及がないが、桐は他の家相書では凶の樹種のひとつである。時代によって樹種が変動していることがわかる。

即断はできないが、『作庭記』の「樹事」の項が何らかの機会に江戸後期の家相書に取り込まれた可能性は否定できない。

4. 家相書の種本・参考書目

次に家相家が家相書を著すにあたり、参照あるいはその種本となった書目について検討したい。家相家はどのような書籍を参考、手本として家相書をものしたのであろうか。一部の家相書には参酌した書籍を記しているものがある。例えば疋田慶明⁵⁾著の『家相秘録』(1782)の「樹木之部」の最後に「右地理新書五車秘錦等に出たり」とある。『五車秘錦』とは大阪の書肆でもあった著者高田清兵衛(政度)によって宝暦7年(1757)に出版されたものである。⁶⁾ また、同じく『家相秘録』の四神相応を記した「相宅附説四則」では『三才発秘』を引き合いに出している。『三才発秘』とは中国清朝初期の易学者陳雲岬山が康熙36年(1697)に著した

表－5 築山方位の吉凶

書 名	吉	凶
家相図説大全(1802)	南(半吉)・南(北が家の表側)・西・北西	南(半凶)・北東・南東
相宅小鑑(1802)	西・北西・北・北東	東・南東・南・南西
家相全書(1804)	北西～北東	東～南東～南・西
家相秘要鑑(1825)	西・北西・北・北東	東・南東・南・南西
家相秘伝(1826)	南(半吉)	—
家相要書(1828)	南(条件次第)・北西	南(条件次第)
宅方明鑑(1844)	北東・北・北西・西	南西・南東・東
家相方位指南(1850)	北西・北・西・南(条件次第)	—

ものである。この『三才発秘』については日本側で『相宅小鑑』の著者苗村三敲が『三才発秘鈔要』（文化4年[1807]刊）を著し、その内容を抄録している。

天保2年(1831)に楠田平蔵義則が筆写した『家相秘伝録』をみると中国明代の図解書『三才図会』（王圻撰、全106巻、1609年刊）の「第五函宮室図会」から書き写したところがある。図一1の右が『三才図会』の「第五函宮室図会」の第3巻にある「宅内形吉凶図」の一部である。左が『家相秘伝録』に筆写されたものである。

この『三才図会』からかなりの家相書が部分的に借用しているようである。種本として大いに活用されたのではないであろうか。例えば前述の『家相秘録』の「住宅門戸之部」の「大樹門口に対すれば疫病をまねく。門前に両枝の樹あるハ不祥也」、あるいは『家相秘要鑑』（詳しくは後述）の「門戸門口之部」の「主形客形」に「門前ニ朽タル大樹有ハ病難多クシカモ葉ノ功ナシ。門前ニ双股ノ樹有テ天ニ朝シ向フハ不吉ノ相也。門前又ハ門脇ニ有柳ハ禍有但東向ノ宅ハ不苦。門前ニ大樹有ハ禍ヲ招ク相也。…」などは『三才図会』の記載にあるとおりである。

安政7年(1860)に刊行された『宅相極秘洛地準則』（多田鳴鳳著／洋々斎蔵版）は「樹木総論」のところで「風水秘録ニ曰宅ノ内外木或ハ竹忽白キ粉ヲ生ズル時ハ家ニ不孝アリ」とあり、『風水秘録』を参照していることがわかる。『風水秘録』は文化13年(1816)、西岡玉全によって著されたものである。西岡玉全は表一1にある『家相玄機略』（1808）『三才精義』（1815）の他にも『撰輯曆』（1809）、『地相秘奥判断』等の著書があり、江戸後期の京都の暦算家、相法家であった。

図一1 『家相秘伝録』（左）と『三才図会』（右）

次に家相書間での内容の異同を検討すると、先の刊本の内容が後にそのまま引き写されている例がまゝある。

『家相極秘白虎巻及附録』の奥書には「安政六己未十二月十五日／司天家土御門／安家直御人／徳島藩天文家／板東嘉次右衛門厚孝／万延元庚申年八月一日／司天台山路弥左衛門諸孝／山路金之丞彰常／高橋信三良元貞／右ハ新法歴術及航海術法之皆伝御免許御下ヶ被下御伝授ニ相成候也／板東嘉次右衛門殿／家相極秘白虎巻／家相秘伝録共」とあり、徳島藩天門家の板東嘉次右衛門に免許皆伝が与えられたことがわかる。この『家相極秘白虎巻及附録』の「池溝之部」「樹木之部」の記述を見ると天明2年(1782)に刊行された正田慶明の『家相秘録』とはほぼ同じ内容である。『家相秘録』をそのまま借用し、引き写したようである。例えば「池溝之部」をみると『家相秘録』には

「主人のいまの後に泉水をはるべからず不吉なり。宅の西に池あ

るは白虎口をひらくと云不吉也。川の水東にながる、ハ順にしてぶなん也。逆にながる、ハ其宅の婦人終にいへのあるとなる事を主る。門口の下に溝有て外へなけれ出るは破敗散財の相なり。…」とあり、『家相極秘白虎巻及附録』では

「主人ノ居間ノ後ヘ泉水ヲナルベカラズ不吉也。宅ノ西ニ池有ハ白虎口ヲ開クト云テ不吉也。川水東ニ流ルハ順ニシテ無難也。逆ニ流レルハ其家ノ婦人、終ハ家ノ主ト成ル事ヲ主ル。門口ノ下ヲ溝ニシテ外ヘ流れ出ルハ財ヲ散ス相也。…」

とある。また、奥書にある『家相秘伝録』とは表題から推察すると文政12年(1829)に刊行された朝見五通の著書と思われる。

また、享和2年(1802)に刊行された苗村三敲の『相宅小鑑』と文政8年(1825)の筆写された肥後熊本純東斎の『家相秘要鑑』（琴堂文庫本は文政13年に奈良義斎によって写されたもの）の「樹木」の項を比べてみると『相宅小鑑』では

「震ノ方位ニ樹木アルハ繁榮発達ノキザシアル相ナリ。巽ノ方位ニ樹木アルハ遠方ヘ名ヲ発ス繁昌ノ相ナリ。離ノ方位ニ樹木アルハ婦人ニ付テ吉事アリ但シ喬キヲ好マズ。坤ノ方位ニ高木又大樹アルハ妻子ヲ尅シ病難絶ズ但シ五尺以下ノ樹木ヲ定理トシテ以上ヲ嫌フハ尅気ヲ恐レテノ事ナリ然レバ其場所ノ広狭ニ順ヒ高下大小ノ樹木分別シテ用捨アルベシ…」

とあり、『家相秘要鑑』では

「震ノ方位ニ樹木有ハ繁榮発達ノ兆有ノ相也。巽ノ方位ハ遠方エ名ヲ発ス繁昌ノ相也。離ノ方ニ有ハ婦人ニ付テ吉事有但シ喬キヲ不好。坤ノ方ニ大木高樹アルハ妻子ヲ尅シ病難絶ズ但シ五尺以下ノ樹木ヲ定理トシテ以上ヲ嫌ハ尅気ヲ恐レテノ事也然ハ具場所ノ広狭ニ順ヒ高下大小ノ樹木分別シテ用捨アルベシ…」

となっており、ほぼ同文といえる。引用は略すが「假山泉池洗盆」（假山は築山の意、洗盆は手水鉢の意）の項も全く同様である。項目のすべてを引き写すことはないが、家相書によってはいくつかの書目から適当に取捨選択して、いわば編集することによって新たな家相書が作られていたようである。

5. 家相家について

家相書の著者については従来、それほど詳しくは分からなかったが、高岡三代祥三直彦なる家相家が文政6年(1823)に家相の概説を『家相考羅經正伝』（自筆本）として著したなかに当時の著名な家相家の名前が記されている。それによると「今世家相ノ道大ニ行ハレ諸国ニ於テ相者ト唱称スル者挙テ算ルニ違アラス京師（京都）ニハ苗村三敲、西岡玉全、西村健次郎、北尾南向、松浦泉隣、浪華ニハ大井寛山、沢田五楽軒、松浦東鶏、井上主殿、和州（奈良）ニハ犬飼谷六三郎、正田慶明、紀州ニハ加藤甚之進、名倉藤蔵、江州（滋賀）ニハ野田藤吉、水野化龍軒、勢州ニハ青木泰祐、東都ニハ平岡米山其外術ヲ尽シ書ヲ顕ス者少カラス」と当時、巷間で活躍していた家相見をあげている。

また、当時流布していた家相書には「家相図解、家相大全、家相秘録、相宅小鑑（鑑）、家相全書、三才精義、龍背発秘等其外数品アリテ…」と述べている。

このうち『龍背発秘』⁷⁾は表一1に記載はないが大田錦城(1765—1825)に学んだ漢学者荒井堯民(晴湖)が直伝として記したものである。

『家相考羅經正伝』には家相家の始祖と称された摂州高槻の神谷正春(古暦)についても記している。「予カ先師神谷古暦正春先生ハ古今絶論ノ相者ニシテ今海内ニ用ユル所ノ家相書ニシテ九ハ先生ノ伝タリ浅学ノ輩其奥儀ニ至ラスシテ八宅明鏡三才発秘黄帝宅経⁸⁾等ヲ抜粹シテ是ヲ交ヘテ教導クモアリテ今ニ至テハ紛々トシテ其源ヲ失フ者又少カラス」とある。古暦については松浦久信⁹⁾(東鶏)の『家相故歴伝』（享和元年[1801]）でも触れている。この伝書は「鬼谷先生ノ伝ル所」のものを延享の頃(1744—47)に

神谷古曆翁が伝写した三巻を東鶏が増補したものであるという。「鬼谷先生」とは不詳であるが、東鶏が古曆翁から家相を学んだことが察せられる。

幕末に活躍した『宅相明鑑』（天保15年刊[1844]）の著者平沢進（白翁）はその序によれば「白翁先生、管崎氏、名ハ勝字ハ伯昌、出羽某侯藩中之士也」とありもと出羽藩士であった。その後江戸に出ト術を学び平沢と改姓したとある。

6. おわりに

下野の石井吉兵衛（光致）なる人物が著した『害事論』（文政11年[1828]刊）には巻間に行われている家相方位の説が如何にいい加減であるかを縷々述べている。「寛政享和ノ頃口浪華ニ某氏ト云ル有テ自己ノ感ヲ挙テ家相ト云事ヲ称シテ世俗ヲ迷ハス所謂ル一盲十盲ヲ引ナリ…」この「浪華ニ某氏」とは家相の始祖神谷正晴（古曆）のことである。さらに『害事論』は「家相図解及ヒ家相大全等ノ書ヲ著シテ世人ヲ惑サントス」と糾弾する。『家相図解』の著者は長田葉雀⁹⁾であり、『家相大全』の著者は松浦久信である。また、「家相全書（長田葉雀著）ト云書ヲ見ルニ是亦固ヨリ全クトルニ足ラス」と批判している。又、大田錦城についても「錦城太田氏著ス所ロ家相師伝神法吉凶方位明弁五行図解等ノ書目アリ今此龍背発秘ヲ書モ此等ノ書ヲ校讐シテ出セル書ト聞及ヘリ夫太田氏ハ今世ノ大儒先生ナリ其人サヘ此ノ如キ附会誕妄ノ説ヲ云出シ世俗ヲ惑ハス…」と手厳しい。しかしながら、迷信・俗信であっても巻間に流布していたことは事実であった。表一1にDと記した版本は明和年間から明治中期まで百数十年間名古屋で貸本業を営んだ大野屋惣八が扱っていた家相書である。11種にのぼり、ほぼ主要な家相関係の刊本が含まれている。貸本という形で流布していたことがわかる。また、出版にあたっては大手の版元がかかっている。また、留意したいのは家相書の出版は大阪を中心に広がったことである。最も熱心であった版元は大阪高麗橋一丁目に店があった藤屋弥兵衛[星文堂]であった。星文堂はわかっているだけでも『家相秘録』『家相図解』『懷宝家相早合点』『家

相（図説）大全』『相宅小鑑』『図解捷徑家相全書』『家相必用方鑒精義大成』『家相（図解）全書』『家相本義』『家相故歴伝』『図解捷徑家相全書』『（方位宅相）三才精義』『家相方位図説』の版元であった。

最も多くの書肆が合板（共同出版）、売出（販売）にあたったのは『宅相明鑑』（平沢白翁著／天保15年刊[1844]）で、江戸の書肆須原屋一統の総本家の須原屋茂兵衛も加わっている。以下が書肆の一覧である。

江戸：須原屋茂兵衛・岡田屋嘉七[尚古堂]・山城屋佐兵衛[玉山堂]

京都：勝村治右衛門[文徳堂]・銭屋惣四郎[竹苞楼]

尾州：永楽屋東四郎[東璧堂]

伏見：亀本屋半兵衛

大坂：藤屋弥兵衛[星文堂]・敦賀屋九兵衛[文海堂]・敦賀屋彦七[文会堂]・河内屋喜兵衛・同直助・北尾善七[春星堂]・橋本徳兵衛[含章堂]・細屋茂兵衛・秋田屋幸助

上述のとおり多くの版元から家相書が刊行され、それがまた広く読まれたことは間違いないであろう。先に述べたように家相は市井の規範となり、吉凶によって行為が選択される。それに解釈を与えるのが家相家であった。逆にかれら家相家達が庭造りの樹木・池泉・築山等に吉凶の言を発しえたのは、庭造りについて市井の人々から何らかの判断を求められたためでもある。また、家相書のなかに庭造りへ言及がなされたのは江戸後期において市井の庭造りの隆盛という背景があったことは想像に難くない。それは『石組園生八重垣伝』『築山庭造伝後編』等の庭のデザイン・ブックである作庭書の出版によっても裏付けられる。家相家は需要に応じ庭造りをその相術の射程に取り込み、庭の判断基準を作り出したともいえるのではないだろうか。

謝辞

琴堂文庫の閲覧に際し、彦根城博物館史料室には便宜をはかっていただき、また、学芸員の野田浩子氏には大変お世話になった。記して感謝申し上げたい。

引用及び注

1) 琴堂文庫の呪術・占術・家相・人相等の易学・相学関係書は1,651タイトル、2,786冊を数える。（故西村直道彦根市立図書館長の調査による）	53(4),280	9) 『享保以後大阪出版書籍目録』によると松浦久信（東鶏・長門）は大坂南瓦屋町に住していた。『家相考羅経正伝』には松浦久信を「陰陽官安信ノ御家ニ土金兼備祭ト云異曾テ無之多クハ天王寺派ノ相者ノ伝ニシテ松浦東鶏父子等秘スル処ノ伝トス拙キ事挙テ云ヘカラス」と批判している。ちなみに父子とは松浦東鶏と同琴鶴のことである。
2) 表一1～3では『家相伝四神中央之奥義』と略記。	5) 『享保以後大阪出版書籍目録』（1964年復刻）によれば『家相秘録』上梓の時期には大阪呉服町住となっている。また、足田本兵衛ともある。	10) 『享保以後大阪出版書籍目録』によれば大阪玉水町住である。
3) 名は富鄰，字は貴徳，通称頼母，号謙堂等，『仙台人名辞書』によれば元仙台藩士，天保13年(1842)頃，江戸神田お玉ヶ池に住し易学家相を以て名をなした。明治15年(1882)頃没。	6) 樋口秀雄・朝倉治彦編著(1962):享保以後江戸出版書目:未刊国文資料刊行会，112	
4) 田中正大(1990):『作庭記』，造園雑誌	7) 刊本は文政10年(1827)である。	
	8) 『八宅明鏡』は唐楊筠松撰，清顧澹籌校で清乾隆帝期に刊行。『三才発秘』は本文で記述。『黄帝宅経』は明の周履靖輯。	

Summary : We can understand that publications of garden design books, such as *Tsukiyama teizoden* by Kitamura, E. in 1735 and *Tsukiyama teizoden kohen* by Akisato, R. in 1828, substantiate prosperity of common landscape gardening in the late Edo period.

Many *kasō-shō* (textbook of house aspects) had been published from 1780s to 1860s, some of which touched upon landscape gardening, especially about trees, ponds and *tukiyama* (artificial hill). The common people of Edo had needed presentative models depending on *kasō*, originally based on the ancient Chinese theories of *yin* and *yang*, for making a garden or a house. In a sense *kasō-ka* had made standards of judgement connected with landscape gardening. We must pay special attentions in mind to the popularity of *kasō* among common people in those days.